

## 靴

大きな、塀ぎわに置かれている、コンクリート造りのごみ箱の中に、一足の靴が捨てられてありました。

靴は、まっ白によごれて、すっかりいためつけられた身体を、ゴミと一緒に、暗い、じめじめした箱の中にとじこめられて、ぼんやりとしておりました。

ときどき、ガタンと音がするので、ふたが開かれ、ぱっと、一時に世界があかるくなりました。すると、ザーッと、頭の上から、なにやらよごれたものがかけられました。

かけられても、もう、動くことができないので、仕方なく、そのままじっと、がまんしていなければなりませんでした。それは全く辛いことでありました。

バタン、と、音がすると、またもとの暗さにかえります。ザーッと頭からかけられたもののために、今にも息がつまるかと思われます。堪えるために目をつぶります。やはりまっ暗です。目先をくらくされた靴は、自分の行く末も暗かったのでありました。

「これでいいのだろうか。」

疵だらけになった身体を、どうすることもできず、くさくて狭いゴミ箱の中で、靴は考えておりました。

永い間、主人に忠実に仕えてきたその結果が、こんな中に捨てられたのだ！

「これでいいものだろうか。」

大事にされていた時のことを想いながら、情もなく、老いの身を、今にも、苦しさのために倒れんばかりの自分を、こんなにもかんたんに、捨て去る人間の気持ちが変わりませんでした。

おもわず靴はアーと、ため息をつきました。

「これからどうなるのだ。また、どうすればいいのだ。」

考えれば考えるほど、心細くなりました。

だが、忠実につとめあげて来たことは、誰の前にも、どこへいっても、大いばりでいえることを思うと、すこしは愉快におもわれ、一心につとめあげて来た自分がとうといものに考えられました。愛おしさに、我とわが身をだきしめて、自分をなぐさめもしたのです。

自分がうつくしく丈夫であった時には、主人にも、どんなにかかわいく思われ、大

事にされたことでしょうか。

「うん、いい靴だ。恰好もいいぞ。」

そういって、主人は、靴屋の店先で、自分をほめたのでありました。だまってきいていた靴は、たいへん嬉しかったのです。

「上等だ。はき心地もいい。」

「お気にめして、結構でございました。」

靴屋のあるじは、頭をさげるとこたえました。靴は、自分の言おうとしていた、心からの言葉を、自分にかわって、靴屋のあるじがこたえてくれたので、まったく、うれしくなりました。

「僕もお役にたつのだぞ。」

旨がどきんとなりました。おどり上がるほど、靴はよろこんだのです。

それから、毎日、永いこと、雨の日も、雪の朝も、或いはまた、心からはればれとする秋晴れの日も、ただ一心に、仕えたのでありました。

まったく、気持ちのよい日は、ぴよんぴよんと心もおどって、うさぎのようにはねてもあるきました。しかし、雨の日、雪の日は、泣きたいほどに、辛いことがありました。

身体がひえきってしまい、目がくらみそうになり、身体のしんまで、なさけなさが通ってしまいました。

辛いな、苦しいな。と、おもったことも、二度や三度ではありません。でも、その度に、僕でも役にたっているんだぞ！！と、叫ぶ、つとめの声にかけまされて、元気をつけていたのです。

家へ帰って、踏石の上にぬがれると、ホッと、息をついたのでした。そして、今日も一日、つとめを終えたのだ、と、すっかり安心いたします。それから、下駄箱の中にしまわれると、疲れたからだを、明日のために、のびのびとのばして、熟睡するのでした。

レコードが鳴り、きれいな女の人がいる店へ、主人と行ったこともありました。

組まれた足先に、ぴかぴかひかる靴を見て、

「まあ、きれいな靴なこと。上等ねえ。」

と、そこの女の方はほめたのです。

すると、主人は得意になって、

「やすものは、僕はきらいでね。はき心地がとてもいいぜ。」

といて、自分を見せたこともありました。

また、よその家の玄関でぬがれ、帰りぎわにその家の主人から、

「ほ、ほう、りっぱな靴をはいているね。」

とほめられたこともあったのです。

なにもかも、考えてみると、まるで夢のようでもありました。

永い間、ほんとうに心から休むひまなく、つとめにつとめて参りました。年をとっても、元気をだして働いてきたのであります。ところが、今になって、主人は、平気で、ポッと、捨ててしまったのでした。

「これでいいものだろうか。」

老いたる靴は、涙をためて考えました。

「わからない。人間なんて勝手なものだ。」

そうも心で思いました。

「みんななかまの者たちは、自分とおなじなのだろうか。使いはたされ、年老いと平気でぱんと捨てられる。捨てられた自分たちは、一体どうなるのだ。」

考えてもわかりません。頭が、づきんづきんといたくなってまいります。

くらくらッ！と、目がくらんできました。

そのまま、訳がわからなくなりました。

つとめが果たせて、自分の心に問うてみて、恥じないことをして来たら、それでりっぱな一生なのだ。おれたちも、つとめ終えたぞ、愉快だぞ。これから行くのは極楽だ。

どこかで、そんな声がきこえてきました。

夢とうつつに、うつらうつらと、老いたる靴の耳に、はいったようにおもわれまして。

「ながい夢を見ていたのだ。」

と、なげいていた靴は、急にしづかな、おだやかな世界にいる自分を見つけました。

そこには、にくしみも、うらみも、悲しみも、なげきもなく、しづかなしづかな、今までに思ってもみたことのない、和やかな世界がひらかれていました。

(昭和10年「金魚と雛鳥」より)